

葉山嘉樹
小林多喜二

現代日本文学館

26

小林秀雄 編集

文藝春秋

現代日本文学館 26

葉山嘉樹・小林多喜二

昭和四十四年六月一日第一刷

著者 葉山嘉樹

小林多喜二

発行者 檜原雅春

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三
電話東京(二六五)一二一一

振替東京七八七四三

印刷 凸版印刷

製本 凸版製本

定価 四八〇円

Printed in Japan

本全集の本文は現代表記にいたしました

目次

葉山嘉樹伝 久保田正文 3

海に生くる人々 23

淫売婦 175

セメント樽の中の手紙 188

山の幸 191

子を護る 202

解説 218

小林多喜二伝 久保田正文 225

蟹工船 245

藪 入 308

人を殺す犬 311

万歳々々 314

滝子其他 319

一九二八年三月十五日 332

不在地主 382

解説 456

注解 465

年譜 473

插画 国松登「海に生くる人々」「蟹工船」「一九二八年三月十五日」「不在地主」

葉山嘉樹伝

久保田正文

I

葉山嘉樹^{はやまよしき}の作品を愛読するひとは今も多い。玄人^{くわうと}すじの読者に多い。

葉山嘉樹を論ずるひとも多い。論ずるひとによって、初期作品をきわめて高く評価し、昭和十年前後からのちの作品を否定するひとと、そうでないひとと意見のわかれるところはあつた。いずれにしろしかし、葉山嘉樹が、質のいい、多くの読者をもっていることにはかわりはない。

それにしてはしかし、葉山嘉樹のひとと生涯については明らかになっていないところが多いのではないか。死後二十年経って、最近ようやくやくやくわしい年譜が若い、まじめな研究者たちによってつくられはじめはしたが、「葉山嘉樹伝記」というふうなものは、私の知る限りまだひとつも書かれていない。

いろいろな理由がかんがえられる。彼の生涯は、活気に充ちているが、それだけに奔放でたどりにくいところが多い。最初の船員生活として、カルカタ航路の貨物船に乗りこんだあと、《その船を下りてからの生活は、スピードの速さと、転換の速さとで、順序も年代も思い出せない。その間に二三度船を換えたと思う。》と、葉山じしん「略伝」に書いているようなところもある。

妻喜和子との間にうまれた二児が、大正十四年にあいついで死ぬ。若い、めんみつな研究者のひとりである浦西和

彦が、葉山嘉樹の除籍謄本までとりよせてしらべているから、その事実には誤りはないはずである。しかし、平林たい子の「葉山嘉樹の想い出」(「自伝的交友録 実感的作家論」所収)には、つぎのような記述がある。

《前の夫人は、葉山氏が労働運動で監獄に入っている間に、愛人をつくって逃げてしまった。葉山氏の言葉によれば、彼の子供はその間に餓死したという。小説にもそう書いてある。が、現実人間が餓死するということは滅多にないことである。おそらく彼一流の誇大な比喩ではあるまいか。しかも、不思議なことに、後の夫人が私に打ち明けた話では、葉山氏の小説が盛んに売れるようになったところ、一通の手紙を持った少年が訪ねてきたそうである。葉山氏はその手紙を見ると、こそこそと金を封筒に入れて持ち帰らせた。

夫人の印象では、その少年はどう考えても葉山氏の息子だとは思われなかったという。とすれば、餓死したという息子は生きていて、別れた夫人と一緒に暮らしていたのではあるまいか。》

おなじ疑問は、中井正晃^{なかい しょうこう}も書き残している。「作家・葉山嘉樹の生涯―回想ノート・九」(「社会主義文学」九号、昭和三十三年六月刊)につきのように書いている。《喜和子さんとも最も親しくしていた同志の一人だったT氏の話によると、葉山の入獄中に病死したのはたしか次男一人で、長男の嘉和は喜和子さんが連れて逃げたというのである。》

その後、昭和四、五年ころ、葉山嘉樹の長男と称する少年が、父に会いたいから住所を教えてくれと言って青野季吉のところへあらわれたと、青野季吉が中井正晃と鶴田知也とに語ったという。

二人の子供が「餓死したことを聞いた」と、葉山嘉樹じしん書いているのは、小説「誰が殺したか？」の序章冒頭においてである。

《嘉和、民雄、二人のわが子よ！》

という、バセティックなよびかけをもつてはじまるこの小説は未完であるけれども、年譜にてらしあわせてみると、ほとんどそのまま記録的・伝記的小説とみなしうるものである。前述の浦西和彦の調査もあって、嘉和・民雄の二児の死去は事実であろうとおもわれるが、「御身らは……」



天龍川畔の飯田線敷設工事で

というふうに、二人によびかけている調子からも、すくなくとも「序」には、とくにその後半において、しぜんに詩のような急迫した調子と形式にせりあがってゆくいきおいにてらしても、かなり明らかな激情によるおのずからの誇張が存在することもあらそわれぬようにみえる。平林たい子や中井正晃やの憶測に思ひすがしがあるにしても、《餓死》をうたがっているところにはそれだけの真実があるだろう。

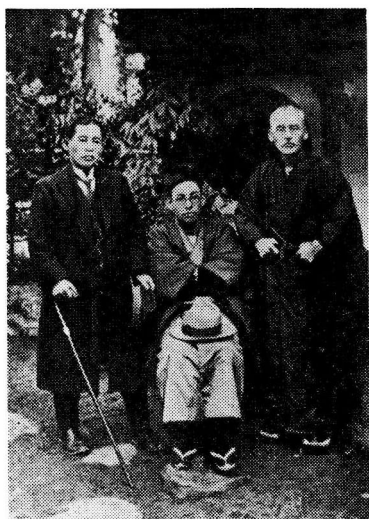
つまり、葉山嘉樹のレーペンを、葉山嘉樹じしんの証言によつてたどるためには、この種類のおとし穴が数多く存在するとかんがえなくてはならぬ。もともと、文学者の自伝や自作年譜や記録やは、細かなデータにおいては信用できぬところの多いものであることは、伝記作者にとつて常識である。すくなくとも葉山嘉樹自作「年譜」は、クロニクルとしては誤っている部分の方が多いというふうなものである。

しかし、まとまった伝記の書かれていないことの理由は、正確なデータが整備されていないというようなところに、主な理由があるわけでもないだろう。葉山嘉樹について一席弁じるひとはずいぶん多い。友人・関係者の印象記や追憶ばなしにもこと欠かぬ。それにもかかわらず葉山嘉樹にはどこか、全体像を容易にはつくらせないようなものがある。「誰が殺したか？」の「序」のような美文調をほとんど唯一の例外として、葉山嘉樹の文体は一般にきわめて即

物的である。ときには八方破れふうともみえるほど体当り的であり、即戦即決主義であり、徹底して現場主義的であり、即現実的であり、すなわち反観念的である。統一的・総合的・系統的なものは、こういう個性にはなかなかちがいがたい。コンフォルミズムを、気質的に拒絶する。優等生的なもの・英雄主義的のもの・偉大なものに体質的に反撥する。《^{わづ}梓を外してしまつた》（『文学的自伝』）もの好き。世のつねの《伝記》などという梓でおさえられることを、じぶんの方からきらっているようなところが、葉山嘉樹には生来そなわっていると言いうるかもしれない。

II

葉山嘉樹じしん、じぶんの経歴をしるした文章には、改造社版「現代日本文学全集」第五十篇「新興文学集」（昭和四年七月刊）につけた「略伝」があり、おなじく改造社版一冊本「葉山嘉樹全集」（昭和八年二月刊）につけた自作「年譜」があり、さらに「文学的自伝」（『新潮』昭和十一年十一月号—「葉山嘉樹隨筆集」所収）がある。このほか、大正十三年以後の日記が十七冊にわたって書き残されていることが死後に明らかになり、刊行の予定があるらしいが、一般にはいまそれはみることができない（小田切進「葉山嘉樹の日記」—『文学』昭和四十一年八月号、参照）。しかし、いま私たちが葉山嘉樹の生涯の事実を、くわしくもまた正確に知ろうとするならば、葉山じしんのつくつ

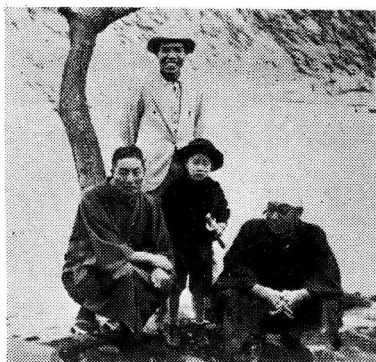


1912年早大入学のころ 中央が葉山

た隨筆ふうな年譜や自伝によるよりも、新しくつくられた二つの年譜によるものが有効である。清水茂・畑実作「訂補・葉山嘉樹年譜」（文学批評の会編「現代文学研究叢書I・プロレタリア文学研究」昭和四十一年十月刊）、ならびに、浦西和彦作「葉山嘉樹年譜」（岐阜県坂下 女子高等学校文芸部発行「友樹」第三十八号—昭和四十一年十月発行—以下連載、未完）である。

そこで、以下はこれら篤学の研究者たちの年譜をたよりにしながら、作者じしんの作品や、友人、関係者の書いているものなどを適宜にとりあわせながら、葉山嘉樹の生涯と文学のアウトラインをたどることにしたい。

III



諏訪湖畔で 左から二人目里村欣
三 その右長男嘉和 右端葉山

葉山嘉樹は、明治二十七年（一八九四）三月十二日に、福岡県京都郡豊津村大字豊津六百九十五番地にうまれた。名前について、本名嘉重という説が一時おこなわれたことがある。これは青野季吉が昭和五年ころ言いはじめたことで、古い新潮社版「日本文学大辞典」などもそれによっているが、この説には根拠がないこと、名前のよみかたは「よしき」であることを、浦西和彦がしらべている。父荒太郎四十六歳、母トミ四十一歳のときの子供で、長男である。

父荒太郎にはすでに小祝ゆきとの間に娘みつがいて、小祝ゆきは、みつを産んで間もなく死去した。トミとは、その後結婚したが、彼女には先夫松本次矩との間にうまれた松本武次郎がいた。つまり、嘉樹には異母姉みつ、異父

兄武次郎がいたわけである。

「略伝」には、葉山嘉樹じしん、

《明治二十七年三月十二日、福岡県豊津村に生まれたそ
うである。

父は九州人

であり、母は会津若松の人間であった。》

と書いている。安政元年生まれの女性の戸籍にはわからないところが多く、トミの会津若松生まれというのが年譜作者に確認する方法がなく、そのために「実母はもしかすると戸籍上のトミではないかもわからない」という説が、清水茂・畑実から出ているが、浦西和彦は、トミは武田家の出であることを考証し、清水・畑説に反論している。明治三十九年（嘉樹、十二歳）ころ荒太郎とトミとは別居することになるが、それから十五、六年後、大正十年に名古屋で、嘉樹はトミをひきとって、大正十三年に彼女が死去するまで同居している。

父は小官吏であつたと、葉山じしんは書いているが、年譜作者たちは彼が京都郡の郡長であつたことを調べ出している。明治二十年代の郡長といえば、いまの県知事くらいの格式であつたはずだ。

小学校、中学校とともに豊津で卒えた。中学生時代からかなり気ままな行動があつたらしく、《学校の成績は良くないし、女にはだらしがないし》（『文学的自伝』）、卒業のときには試験の始まる前夜、《酒を一升、切り通しの断崖に向かつて飲んでひどく泥酔した》（『略伝』）りした。

大正二年に豊津中学校を卒業した。《文学志望だったの
で、早稲田の文科に入れてくれと、父に頼んだが、学費が無いと答えられた。「じゃ、家売ればいいじゃないか」と云った。家は確か四百円で売れた。「これだけつか無い

ぞ」と云って、四百円を全部一度に渡された。(「自作年譜」)。息子も相当なものだが、父親もなかなかの豪傑であったということになる。

四百円もって東京へ出た嘉樹は、入学手続はとったが授業料も払わず、最初の一学期でその金をつかい果たしたという。葉山嘉樹生涯の放浪生活はそのあたりから本格的にはじまるのである。

横浜へ行って、花咲町の海員下宿に入りこんだのは《夏の日暮》であったと「略伝」には書いてある。しかし、「訂補・葉山嘉樹年譜」によると、作文の成績八十一一点などということもあるから、早稲田大学予科でまったく授業に出なかったというわけではないらしく、学費未納で除籍処分になったのは十二月一日であるという。

海員下宿にころがりこんで、知りあった青年の手引きで山下町のローラー・スケート場のボーイになった。そのときの経験は、のちの長篇「海と山と」(昭和十四年)に書いている。経営者はノルウェーかスエーデンの女で、サーカスをもつて日本へ来て、サーカスを解散してローラー・スケート場をはじめたのだという。客には外国人の青年男女が多く、入口で彼らにスケート靴をはかせるのがボーイの仕事であった。

数か月して、日本郵船の讃岐丸に水夫見習として乗りこんだ。六千噸余りの船で、カルカッタ航路の貨物船であった。「文学的自伝」によると、当時前田晁(あきら)でゴリーキー

の短篇をよんでいて、《ボルガの河船の、ボーイになって苦労してみたい、とか、税関の眼をかすめて、夜サンパンを漕いでみたい》というふうな夢をいっていたが、現実の貨物船生活は、なまやさしいものでないことがわかった。横浜から神戸へついたらにはもう下船したいと思った。航海中に奥歯が痛くて耐えられなくなり、船底の大工部屋に行って、釘抜きで歯を引っかくというふうな日目にたえているうちに、《不良少年染みたくらいのことでは、当時のマドロスの間にあっては、ちと、善良すぎることも納得して来た》と、同時に、乱暴で兇暴で手のつけられないようにみえるマドロスも《粹が無いだけにすぎない》のであり、鼻の落ちてしまった一等セーラーも、《それはただ鼻が落ちただけであり》、《心は同情心の深い人間であることが分かった》というふうな経験をした。



「海に生くる人々」出版記念会で 左は菊枝夫人

《そんな生活の間に、私はだんだん、形式的なもの、儀礼的なものを嫌悪するようになった。そして地上における偉大なものを嫌い、どこにでもザラにあるものが好きになった。》

《この最初のマドロスの生活が、私からスッカリ粹を外してしまつたらしい。》と、そこで書いています。

その航海を終わつて、翌年下船してからドストイェフスキイの「罪と罰」をよみ、《粹なし》の傾向はいよいよつよまつた。つまり、かぞえ歳二十の青年にとつての、その貨物船航海経験は、やはり彼のその後の生活と思想とを、かなりつよく支配することになったものであるだろう。

そのあと、その年のうちに室蘭^{むろらん}・横浜間往復の石炭船に三等セーラーとして、月給六円で乗った。「海に生くる人



左から次女三千枝 嘉樹 長男民樹 菊枝夫人

々」は、その船での生活を材料にしている。船員生活は、そこで切り上げになるのだから、正味一年足らずということであろう。もっとも、清水茂・畑実説によると、「呪わしき自伝」にてらして、大正九年、明治専門学校事務員退職後に短期間、もう一度海員生活にもどつたとみられるという。しかし、浦西和彦は、明治専門学校時代の同僚波田国雄の直話によると、その事実はありえないと言っている。船をおりてからの二、三年は自作「年譜」に言う《玩具屋の店頭一枚売りしている、フィルムみたいな、連絡のない生活が始まつた》ときである。《医者^{いしや}の玄関番、出版の外交員、学校助手、セメント工場、新聞記者、等々をやっているうちに、いつの間にか労働運動に捲き込まれていった。》（「略伝」）ということになる。

郷里へもどつて、鉄道院門司管理局の臨時雇になったのは大正六年らしい、鶴田知也の実父高橋^{たかはし}席太郎が鉄道院職員養成所長をしていて、その紹介であつたという。鶴田知也との交友もそのころからはじまつた。しかし、そのつとめも一年とはつづかなかつたようで、大正七年には戸畑の明治専門学校の事務員となつた。ここでも、《マドロス時代の粹の無い生活》を考へるために、庶務主任の数学の先生の排斥運動をおこして、化学教室の図書係に移された。しかし、この図書係はなかなか快適であつたらしく、回転椅子に腰かけて、主としてロシア文学などを耽読^{たんよく}した。

山井ヒサと結婚生活に入つたのも大正七年のはずで、大



名古屋時代 労働運動の同志と
前列中央葉山 その前長男嘉和

正八年四月五日には長女タミ子がうまれている。浦西和彦の調査によれば、山井ヒサは、ヒサエが正しく、明治二十七年二月十八日生まれで、山口県豊浦郡宇賀村の遠藤富

穂認知となつてゐるという。葉山嘉樹は正式に入籍させていない。「年譜」に、「故郷へ帰つて結婚したが、失敗した。」と書いてゐるのは彼女のことであろう。「鼻を、蛸う男」に、「嫌いで堪らないのに貰つた女」ではなかった」と書いてゐる。うまれたタミ子は一週間生きただけで四月十一日に死ぬ。翌年三月十二日にはまた愛子がうまれたが、その娘も十月十三日に名古屋で死ぬ。それだから、「鼻を、蛸う男」のはじめに、「私の女房と云うのが、「世間の評判のために生きてゐる女」だった。何のことはない質の悪い龍眼肉のように、色が黒く、萎びて、コチコチになっていた。」と書いてゐる妻、その妻と、娘の誕生日の祝い餅の

ことでけんかをして《私》が家をとび出すというのも、全体がフィクションかもしれないのである。

《化学の図書室も、回転椅子も長くはなかった。新らしく出来た情婦と一緒に、駆け落ちして名古屋に出た。》と「文学的自伝」に書いているが、「鼻を蛸う男」は、この《情婦》との出会いを情熱的に語っている。前述のように、娘の誕生祝いのこととで妻と争つて家をとび出し、汽車で二時間ばかりのF市にゐる新聞記者の友人の所へ行き、三日ばかりぶらぶらして、金もなくなったのでしかたなく帰りの汽車にのり、そこで少女に会う。《十七から上ではないらしいのに、三十にもなるおかみさんの着るような、じみな着物を着ていた。それがちつとも不調和でなかった。》

「これだ!」と、私は思った。

何が「これだ!」か、そんなことは私にも分からなかった。ただ、「これだ!」と思ひこんでしまった。おまけに、「この娘と別れたら取り返しがつかない」と、なぜともなく感じた。《というしだいである。そして、たちまちその日から、この小説の《私》と、《塚田きよ子》は結びつくのである。

前述のように、子供の誕生祝いなどは明らかにづくりごとであるから、小説の記述をそのままビオグラフィのためのデータとしてあてはめるわけにはゆかぬが、浦西和彦の調査によると山井ヒサは八月十一日には別の男性と婚姻届をしていて、五月か六月ころは葉山嘉樹と別れたらしいと

いう。葉山の、塚越喜和子（明治三十四年十二月十七日生）との同様もそのところからとかがえられる。

こういう状態で戸畑にいらなくなり、山井ヒサののこして行った娘愛子をつれて、十月には名古屋へ出た。明治専門学校の教授のひとりの紹介で名古屋セメントに勤めぐちを得た。

名古屋時代はちょうど三年間つづく。そして、三十歳までのこの時期が、もともと激動的な生活である。当時名古屋では労働運動が活潑（かつぱく）になりはじめていたところで、大正四年四月には労働団体「向上会名古屋支部」が、六月には「名古屋労働者協会」が成立して、しぜんそれらとの接触も、葉山嘉樹にはじまる。

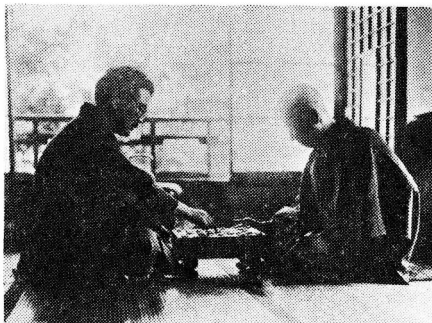
大正十年五月一日に、喜和子との間に嘉和が生まれた。

嘉和は母の胎内から、メーデーに参加するつもりだったらしい、その手を延ばし、足を踏ん張り始めた。と、「誰が殺したか？」に書いている。間もなく母親のトミが一緒に暮らすようになった。

嘉和が産まれて《二カ月ぐらい経ってから》と、小説では書いているが、事実は五月十九日に、名古屋セメントで、《クリスマスの卓子（ダイザル）に載る仔豚（こぶた）の丸焼きの》ように、一人の労働者が丸焼けになるという事件がおこった。「誰が殺したか？」には、そのいきさつがくわしく描かれている。その事件をきっかけに、労働組合をつくることに奔走し、失敗して、その会社をクビになった。

小林橘川（こばやし）の主筆をしている「名古屋新聞」に入社したのは六月初旬というから、労働者焼死事件から組合結成煽動とその失敗、誠首（まごしら）の全過程を、一か月足らずの間に目まぐるしく走りすぎたわけである。

名古屋に出て間もなくのころからしいが、仏教思想研究団体とでもいう性格の「極楽社」と、その機関誌「極楽世界」に関係をもっていた。大正十年五月二十五日、二十六日の「新愛知」に、葉山嘉樹の「小林橘川氏に」が発表されたが、これは「名古屋新聞」にのった小林の意見についての批判である。《宣伝に碌（ろく）なものなし》とする小林に対して、クリストや釈迦の教義の主張も一種の宣伝なの



プロレタリア文学の同志前田河広一郎（左）と

るかとおもうと、「極楽世界」の存在を宣伝しているらしいところもあり、小林を批判しているかと思うと、いんぎんにあいさつしているようなところもあって、その後つねに菌切れの良い文章を書いている葉山嘉樹としては妙にあまりいい文章である。しかし、「名古屋新聞」に葉山嘉樹が入社することになったのは、この文章がきっかけになったのであろう。小林橋川は名古屋労働者協会のリーダーのひとつでもあった。新聞社入社とともに、葉山民平のペンネームで活潑な執筆活動をはじめるとともに、小林橋川と一緒に労働者の組織のために演説をしてまわるような活動もはじめた。

その年、七月から八月にかけて神戸の三菱、川崎両造船所のストライキがおこり、それには新聞特派員として参加して応援したり記事を送ったりした。九月の横浜ドックの争議、十月の愛知時計ストライキと労働争議がしきりにおこり、葉山嘉樹はそれぞれに熱烈な応援をした。とくに後者のばあいは、争議団の内部へ入って指導的に働いた。この争議団のデモに弾圧があつて、葉山も検挙され、起訴され、公判で禁錮二か月の刑を判決され、控訴が棄却されて名古屋監獄で服役し、大正十一年七月中旬に出獄した。

小林橋川は理解のある主筆であつたが、市会議員選挙からんで労働組合と利害が対立し、そのもつれから葉山はその新聞社にいられなくなつたということのようである。出獄後、街頭で夜店の古本屋をひいたり、貧弱な通信社

につとめたりした。秋ころ、母が鉄で舌を切つて自殺しようとした事件がおこり、暮れに喜和子との間に次男の民雄が生まれ、郷里の豊津では父荒太郎が病歿した。

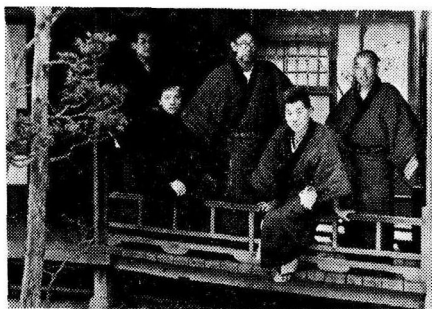
IV

いわゆる名古屋共産党事件で、葉山嘉樹ら十二人が笹島署に検挙されたのは、大正十二年六月二十七日である。すでに六月五日には東京で、第二の幸徳事件かと言われる大検挙があり、堺枯川、山川均、野坂参式(参三)、猪俣津南雄など百余名に弾圧のあつた後である。国際的共産主義運動は、もちろんそのころもう日本にも組織をひろげはじめ、いわゆるアナ・ボルの対立はすでに明らかな勢いになつていた。名古屋に「R.P.会」といわれる「レッド・プロレタリア」を結成し、プロフィンテルン加盟の計画がすすめられていたのは、おそらくその年はじめころかららしく、葉山もその中心メンバーのひとつであった。

この事件は結局、大正十三年十月十四日に、大審院で上告棄却で、葉山嘉樹は禁錮八か月、未決通算六十日の刑がきまり、巣鴨刑務所に入り、大正十四年三月中旬に出所(浦西和彦年譜による)することになる。

しかしこの間、名古屋で検挙され、巣鴨を出るまでの約二年の時間に、じつにさまざまなことが詰まっている。

検挙されて二日後、六月二十九日には、もう治安警察法違反被疑のまま名古屋刑務所に移された。一週間もする



東北地方講演旅行で 左から蔵原惟人
金子洋文 葉山 小堀甚二 山田清三郎

と《筆墨許可》があつて、高島素之助「資本論」が入ってくる。刑務所長佐藤乙二のはからいで小説執筆も許される。「淫売婦」には、七月十日の執筆日附がある。《毎日検閲を受けながら書き上げた》(自作「年譜」)というのだから、昭和十年代にくらべると、十年前の未決監はオトギ話の世界のようなどころがないわけではない。七月二十八日の日記に「創作抄らず」と書いているという。まるで書齋にじこもっているような調子である。

小田切進の「葉山嘉樹の日記」には、このころの記述がところどころ引用されているが、八月七日に妻の喜和子が面会に来て、その日とその翌日の記、さらに九月九日の記

などにてらすと、喜和子の行動について、かなり鋭く直感的にうたがいをいだいた気配がみえる。九月一日に関東大震災があり、千種刑務所でも収容者たちが動揺する。そのことは、のちにいくつかの小説の材料になっている。大杉栄の殺されたことも、間もなく

葉山の耳へとどいている。十月二日に予審終結。十月になつて保釈出所したらしい。

保釈出所後間もなく、友人馬場寛の紹介で、長野県の本曾谷の須原へ移る。私の感じでは、この本曾谷行きが、葉山嘉樹の生涯における、屈折の前ぶれのように思う。かならずしも消極的・否定的にばかりかんがえる必要はないだろうが、内面的・外面的に決定的・象徴的な事件として概観しようようにおもう。すくなくとも、海の間人が山へ入った、外向的なタイプが内向性を求めたというふうな変化が在る。未決監のなかで小説を書きはじめた変化がその過程にある。かぞえ歳三十という年齢のこともある。

葉山嘉樹のように感覚の繊細な、直感力の異様なまでに鋭く働らく個性において、こういう屈折が先触れもなく、後揺れもなく到来するということはありえない。「鼻を覗く男」に、事実関係において意識的なはぐらかしはあるが、女性との邂逅について、《もし、人間に前世というものがあるんだとしたら、俺とこの娘とは、その前世で情死して死ぬには死んだが、浪のために、しっかりと二人の体を縛ってあった扱帯が解けて、波のまにまに離れてしまったんだ。そして、ひょっくり汽車の昇降台で出会ったんだ。》と主人公がテレながらかんがえるところにリアリティのあるのもそのためである。生活のうえでも、思想・文学のうえでも、その後の葉山嘉樹は、夏の時代から一挙に冬の時代へ入るようにおもわれる。言うまでもなく私は、その屈折後

あるいは冬の時代を、文学的な意味で言って消極的・否定的なものとのみかんがえるわけではない。生活的・思想的に言っても、「挫折」とか「転向」とかいふことばでかんがえようとおもうわけではない。もっぱら文学的に言えば、その時期に入つてようやく成熟と内面化のうまれるプラスへの転換のおもむきもあるのではないかと思いたいくらいである。向坂逸郎は、昭和十年代の葉山嘉樹についても、「心の「転向」はしていない。」めしを食うための《うわべの「転向」》であつたと書いてゐる。(「たたかひのともし火」——「総評」昭和四十四年三月七日号)

生活のうえでも、その間に重要ないくつかがおこつてゐる。未決監で書いた「海に生くる人々」が、同郷の先輩堺利彦の手から、青野季吉にわたり、改造社に紹介された。翌大正十三年五月十八日(「遺書」による)に喜和子が出した。KとかSとかいうイニシアルの、葉山の家に出入りしてゐた青年と一緒であつたという。《K》は、清水・畑年譜に紹介された鶴田知也説にみえる金子兼太にあたるだろうし、《S》は浦西和彦のかんがえた酒田定吉にあたるだろう。「鼻を叩く男」では、Sと一緒にいうことになつてゐるが、《酒田定吉》なる人物は、「誰が殺したか?」「歪みくねつた道」の登場人物である。六月二十七日に母が死んだ。そして、その日はまた、名古屋控訴院の第二審で判決のあつた日でもあつた。

大正十四年五月に嘉和が死に、十月に民雄が死ぬ。この

二人の子供の死についても前述のようにかなり不安定がある。「遺書」「出しようのない手紙」「春の悩み」などをならべてよむと、喜和子が二人の子供を残して家出したのか、二人とも連れて行つたのか、ひとりだけ残して行つたのかわからなくなる。

大正十四年三月に刑期満ちて巢鴨刑務所を出所し、木曾川落合ダム工事場で働くために岐阜県中津川町へ移つたのは秋になつてからのようである。

「文芸戦線」大正十三年十月号にすでに「牢獄の半日」は発表してゐたが、同誌大正十四年十一月号と大正十五年一月号とにつづいて、「淫売婦」と「セメント樽の中の手紙」が発表されて、たちまち文壇にみとめられた。「文芸時代」大正十四年十二月号の「文芸時評」欄の、赤木健介「ロマンチック文壇の曙光」は、「十一月の月評をする際に当たつて、この作を見落とすことは重大な過失であると言わねばなるまい。」と前提して、題材においてコンラッドやミッドルトンを偲ばせるものがあるが、その感情や精神に至つては比べるもののないほど新鮮であり特異である。《この感情は醜きものの持つ美しさであり、ロマンチックな暗さを持つ友愛の象徴である。そして精神においては、社会的正義に燃える被虐者の力強い叫びが火蓋を切られてゐる。》と激賞し、《この作を見落とす批評家に恥あれ》と結んでゐる。「新潮」大正十五年三月号の合評会出席者は、

中村武羅夫、広津和郎、藤森淳三、久米正雄、岡田三郎、